
高校生と青春

鈴木 兎兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

高校生と青春

【Nコード】

N8287Z

【作者名】

鈴木兎兎

【あらすじ】

よくある青春のお話。

上（前書き）

上、中、下の三話です。

短めのお話なのでサクサク読めるかと。そして鈴木が大好きな高校生×高校生の青春物です。

いっぱい悩んでいっぱいすれちがっていっぱいイチャイチャすると良いよ。

上

今まで意識しなかった物事も、その端っこの小さなことを知ってしまうと、いつも意識したりしてしまう。考えてしまう。今回もそうだった。

同じクラスの知り合い以上友達未満くらいの、持倉夢登^{もちくら ゆめと}。誕生日は2月9日血液型はB型。帰宅部の爽やかな奴である。いつも笑顔で交友関係も広め。男女ともに仲が良く、みんなからは夢登とか夢、とか呼ばれている。

なんで友達未満な俺がこんなにも持倉のことを知っているかと言うと、あることに気付いてしまったからだった。

あることというのは、彼がいつも長袖を着ていることだ。

今の季節は初夏、7月。温暖化のせいかわ月でもとても暑い。じめじめもしているからたちが悪い。俺含めほとんどの生徒は長袖から半袖に衣替えした。長袖の人も腕まくりをしたりとどうにか涼しさを求めている。しかし持倉はまだ長袖で、袖を下ろしている。たまにカーディガンも着ているほどだ。

体育のときも長袖長ズボンで、着替えのときも1人どこかで着替えにいつていることにも最近気付いた。

気になる。とても気になる。

しかし友達でもない俺がそんなこと聞けるわけがない。もし何か悪いことに触れてしまったらどうすればいいのか。

だから俺はもんもと、いつもは使わない頭を使って想像をしたり、ひそかに情報を集めているのだ。

そんな俺に運が回ってきたのかよく分からないが、今、教室に持倉と2人きりになっている。

俺は友達が補習に行っているのを待っていて、持倉はよく分からないが窓から外を見て鼻歌を歌っている。何を見ているのだろうか。部活？好きな女の子？車？

するといきなり彼がこちらをくるりと向いた。

「上総って野球好き？」

なんだ、野球部を見ていたのか。

「うん、好きだよ。でもサッカーの方が好きかな」

「へえ。部活は？」

「天文部」

「……おお」

持倉は少し驚いた様子。サッカー好きとか言いながら天文学部だもんな。

「この高校って天文部あるんだ」

「うんある。幽霊部員が半分くらいだけど」

「上総は？」「俺はちゃんとした活動しています」

「そっか……」

また持倉は窓の外を眺めだした。気まぐれな猫みたいだな。

それから話すこともなく、ぼんやりと過ごしていた。

「柚ううううううーっ」

がらつという荒々しい音とともに教室に入ってきたのは補習を受けていた草津だった。いつもながら騒がしい。派手な顔に似合う性格だ。

「遅えーよ。それにしたの名前で呼ぶなバカ」

「別にいいじゃん。ねえ夢登」

「ん、俺？……ってか早く漫画返せよてめえ」

「ああ！漫画ね。だからいるのか。珍しいと思ってたんだよねー」
おれはキングオブパイレーツ、とか言いながら草津はロッカーを

「ごそごそし出した。人の漫画をそんな汚いロッカーに……。呆れてしまう。」

「うん、持倉は漫画を返してもらったために教室に残っていたのか。草津の素行に呆れながらため息をつき、1人納得する。」

「それじゃあ帰る準備するか、と立ち上がると草津がごめーんと言ってきた。」

「俺今日はすぐ帰るわ」

「……………は？」

「何言ってるのこいつ。」

「いやー、今日ドラマの再放送あったの忘れててさ。早く帰らないと終わっちゃう」

「何言ってるのお前。俺が待った1時間は何だったんだよ、おいっ」
「だからごめんって。あ、じゃあ夢登と行ってきなよ」

「草津は相当急いでいるようで、足踏みをしながらそう言った。てか持倉？」

「くるりと振り向けばきょんととして持倉は俺達を見ていた。」

「俺が何？」

「柚がフォーティーワンの新作アイスが食いたいんだって。一緒に行ってやってよ」

「おい草津」

「別にいいよー」

「え」

「んじゃよろしくー！」

「草津が元陸上部という足を使って帰っていき、教室にまた二人が残された。」

「……………いいのか？」

「俺、アイス好きだし別にいいよ」

ということと俺と持倉はアイスを求めて歩いていた。

「あつついなー」

持倉はさつきからぱたと手を団扇のように動かしている。あんまり意味ないと思うけど。

「持倉は半袖にしねーの？」

「ん？ あー、うん」

何となく訊いてみれば、切れの悪い答えが返ってきた。

やっぱりよく漫画とかにあるやつだろうか。アザとか傷とか火傷とか。それが身体中の刺青とか……？

何も言わなくなってしまった持倉。ちらつと見てみれば、微妙な顔をしていた。困ったような、不安といった表情だ。

「あ、いや別に俺って暑がりだから気になったっていうかその……えと、うん……」

何か言わないと。そう思ってでた言葉がこれだった。

持倉はそんな俺を見てにつこり笑った。爽やかな笑顔である。

「別にそんな深刻な事じゃないから！ そんな顔するなって」
からからと笑うその顔は先ほどの面影はなく、ほっとした。

それにしても俺は馬鹿だな。気のきいた言葉一つ言えないなんてほんとごめん。心の中でぼつりとそう言葉を洩らした。

○○○●○○

「うまい」

「うん」

もぐもぐととにかくアイスを頬張る。

俺のは期間限定のスイカのアイスとかき氷アイス、それとチョコを加えた三段スノーマンアイス。持倉のはメロンとイチゴとスイカだ。こちら三段。

暑い中食べているとどろどろと溶けてきて大変だ。だから俺たちは何も話さず兎に角食べていた。

「ん、あと一個」

暫くして俺が2個目の中盤に差し掛かるところで持倉がそう言った。見てみれば持倉のコーンの上には最後のイチゴしかなかった。

え、早い。

「持倉って食べるの早いな。俺が遅いのもあるんだけどさ」

ぺろっと垂れてきたアイスを舐めた。美味しい。

「……ああ、上総って口小さいんだな」

じつと俺の口を見る持倉。

「そうかな、小さい？ 気にしたことなかったけど言われてみればそうかも」

小さい頃、口に拳をいれようとして入らなかった事を思い出した。皆は入ったのに自分だけ入らなくて悔しかったのを覚えている。

「……持倉見すぎ。流石にはずいって」

ずっと口元に向けられていた視線に耐えきれず顔を手で隠すと、はつと我に返ったようにわたたと持倉は言った。

「あ、ごめんごめん。そのかき氷アイス美味しそうで」

「これ凄い美味しいよ。一口食う？」

「まじで！？ 食う食う」

ほれ、と差し出せば持倉は顔を近付けてアイスをかじった。そしてみるみるうちに笑顔になった。

「これ美味しい！ 俺もこれ頼めばよかったな」

「結構良いよな、これ」

俺もぱくりと一口食べて持倉を見る。

って、持倉顔真っ赤じゃねーか。流石にこの暑さの中ずっとその格好はやばいよな。何で気付かなかったんだ俺。

「持倉顔赤いぞ。大丈夫か？ どっか中入って食べようぜ」

「え？ あー、別に大丈夫」

「いや駄目だろ。ほら、そこ入るぞ」

「んー」

ずしずし押して、無人のコインランドリーに入る。

中は日差しが入らないせいか、ひんやりとしていた。

「うん、涼しい」

ざくざくとコインをかじれば、どろりと中のアイスが出てきた。

早く食べないと零れる。持倉はもう食べ終わったようで、何も言わずに回っている洗濯機を見ている。赤かった顔も少しずつ治っているようにみえた。こめかみ辺りから顎にかけて一筋の汗が垂れているのが何か爽やかでいいなと思った。羨ましい。

最後のひとかけらを飲み込むと、持倉が話しかけてきた。

「そっいえばさ」

「ん？」

「上総とこんなに話すのって初めてだよな。クラス一緒なのに」

「そっいえばそうだね」

でも持倉のこと結構知っているよ、とは言わない。気持ち悪いし。「結構上総ってクールそうに見えるからさ、普通に絡んでいいのかわかんなかったんだよね」

「は、……クール？ 誰が」

「上総」

「……………は？」

初耳です。俺がクールな訳ないし。

しかし持倉はつづける。

「よく女子とかも言ってるじゃん？ 草津君は明るくて可愛くて、

上総君はクールでかっこいいーって」

きーっと、女子の真似なのだらうか高い声を出して持倉は足をばたばたさせた。

てか草津が可愛くて俺がかっこいいとか……。草津は分かるけど俺がかっこいいとか無いわ。俺としては持倉のほうが爽やかでかっこいいと思うけど。

そっ言えば持倉はぴたっと固まった。

「何言つてんの上総。俺を誉めてもなんも出ないよ」

そこからはどういうわけかお互いの誉め合いになっていた。ごーごーとした音のなかかっこいいーだの憧れるーだの言い合う俺たちはとても奇妙だったと思う。

「でも本当に話しかけづらかったんだよ」

しばらくたつてふたりとも落ち着いた頃にまた持倉はそう言った。
「だけど結構普通っていうか楽しかった」

につこり笑うその顔は凄く爽やかでかっこよくて。でも言っていることが可愛くてふふつと笑い声をもらしてしまった。

「ふははっ、持倉も意外な性格だよな」

「そうか？」

「そっだよ」

持倉もははつと笑った。

それからそれから。

友達未満だったのが信じられないほど俺と持倉は仲良くなっていた。
った。

○○○●○○

放課後、ひとり部室に籠って俺は紙にプスプスと穴をあけていた。先輩たちも受験一色になりつつあり、月に何回か覗いていくくらいしかなくなっていた。他の部員は兼部だったり幽霊部員だったりほとんどいない。静かなところもわりと好きな俺としては嬉しい限りである。

天文部の中の俺は自由気ままに活動をしていた。今は小さなプラ

ネタリウムを作っている。紙に針であなを開けて電気を取り付けるだけの簡単なものだ。俺にデザインなどのセンスは問われても困ります。

外で運動部の掛け声が聞こえる。女子テニス部のジョギングの聲が左から右へと通っていった。

そう言えば草津は女子テニス部のあの子が好きなんだっけ。ポニールの元気で明るい女の子だ。名前は確か西藤さん。今回は草津も本気のようにだし応援してやるか。

エアコンがガンガンに効いている部屋でもくもくと作業を進める俺ってどうなんだろうな。一応高一だしなんかあったほうが良いんだろっけだな。彼女とか彼女とか彼女とか。もうすぐで夏休みだしあと一週間で始まってしまう。

今年は海に行きたいな。去年は何故か富士山を登ってたから今回は爽やかに海がいい。

持倉は海、入らないのだろうか。

うちの学校はプールは選択制で男子はプールを選択するのがほとんどんだけど、持倉はバスケットだった。やっぱりあれかな。いつも長袖なのと同じ理由なのかな。

「なにしてんの」

「っ……！」

ビクツと身体が大きく跳ねた。驚きすぎて声も出なかった。

「も、持倉……」

いつの間にか持倉が入ってきていたようだった。

「驚かせちゃった？」

「ああ。まじビビった。気付かなくてごめんな」

「いや、こつちこそ集中してるとこ悪かった。で、何作ってるの？」
床に散らばっている紙や針を見て持倉は尋ねてきた。

「プチプラネタリウムの機械です。ほら、そことかさそり座になつてるだらう？」

「あ、本当だ。すげー」

天井に紙を向けておおーとかうわあとかはしゃぐ持倉。そんな大したものでもないんだけど、と言えはいや普通に凄いよ！ と笑顔で返された。

「……」

「ん、上総？ 急に黙ってどうした」

「いやー、持倉って爽やかだなあと」

「えー？ ははっ」

少し照れた。

「俺もやっていい？」

「ん。はいこれ」

もう紙に印はついているので、そこを針であなを開けるだけの簡単な作業である。

紙を渡すと、持倉も針で穴を開け始めた。

「てかここ涼しすぎない？」

「そうかな」

「俺でも涼しく感じるんだからエアコンかけすぎだと思っ」

今日の持倉はカーディガン着用。流石に暑すぎるんじゃないだろうか…… という格好である。

そこからは特に会話という会話はなく、部活終了時刻までただ針で穴を開けていた。

下校時間を知らせる放送がなり、俺は紙を床に置いて伸びをする。

「んんんーっ」

ぐんつと大きく体を伸ばし、くああつとあくびをした。

「…… なんか」

「え？」

「あ、いや……うん」

「なんだよ」

「楽しかった」

「そうか？　なんかこんなのにつき合わせちゃってごめんな」

するとなぜか持倉はにこっとして髪の毛をわしゃわしゃとかき混ぜてきた。おい、髪の毛が絡むって。

「な、何っ？」

「いや、もうなんていうかさ……ツボ過ぎるんだよ上総はっ！」

「は？　は??」

わしゃわしゃわしゃわしゃと手を止めないので俺も手を伸ばして持倉の髪の毛をぐしゃっと掴んだ。染めたことのないような綺麗な黒髪は想像していたよりもずつとふわふわしていた。

「持倉の髪さわり心地良いな」

思わず頬を緩ませながらそういうと持倉はカチーンと音がつくように固まった。手も俺の髪を絡めたまま止まっている。呼びかけても返事がない。正直辛い体勢であったから、おい、と強く言えばはっとした表情で持倉は我に返った。

「どうしたんだよいきなり」

そう問うが、持倉はちゃんと答えず、はははーと笑ってはぐらかすばかりだった。

俺も特に気にすることはなく、立ち上がった。頭に乗っかっていた手をとると、ざらりとした感触がした。

「……？」

首を傾げると持倉もどうした？　と不思議そうに見てきた。

「いや、手。なんかの傷か何か？」

一旦は離れた手をもう一度とる。親指の付け根のあたりから手首にかけて大きな傷がついていた。

「これすげーな」

もしかしてこれが原因で持倉は長袖を着ているのかも、と一瞬頭を

よぎったものの、まさか違つたろうとおもつてそのまま言葉にした。
しかし持倉からの返答がない。

「持倉？」

「あー、これね、前にちょっとあつてさ。それより早く帰ろうぜ」
「おう……」

ずっと気になっていた事に少し触れることができた。
だけどそのあとに残つたのは嬉しさなんかではなく、罪悪感だった。

上（後書き）

続きます。

中

ぎくしゃくしだしてから5日目である。ついでに草津に変な目で見られるようになってから3日目でもある。

「なーなー、急にどうしちゃったわけ？ お前ら」

「……は？」

「何言ってるのー、草津」

俺がじとりとした目。持倉がにっこりと、でも何処か拒絶するよな目で見れば、彼は大きめの少しつり目な瞳を細くして睨んできた。珍しくご立腹のようだ。

「なんなんだよー！ いきなり俺のことのけ者にしたくせに、またまたいきなり俺と仲良くしだしちゃってさー！！」

俺はばか！ と、持倉はあほ！ と言われた。なんなんだこいつは……。まあいつもの事だしいいか。

と思ってくるりと体の向きを変えて教室を出ようとしたら、さらに大きな声でバカ柚と叫ばれた。おい、みんなが呆れた目で見てるぞ。やめろ。

「あ、どこ行くの上総」

「持倉……普通に部活」

「そっか。頑張れよ」

「ん」

ぐだぐだと何か言っている草津を押さえつけながら持倉はふつと笑った。俺も笑顔を返して後ろ手に扉を閉めた。

……あれ。

違和感。

持倉ってあんななんだっけ。いつもいつも笑ってるけどあんな顔だ

つたつけ。無理やり作ったような複雑な笑顔。

廊下でぴたりと立ち止まる。通行の邪魔だろうが気にしない。

「……」

持倉はもつと柔らかくて爽やかで優しい、そんな笑顔だったはず。

「……………はあ」

やはり俺はもう間に線を引かれてしまったのだろうか。

仕方ないか。あんな無神経な事言ってしまったんだし。

袋を持つ手に力が入った。

●

部室棟の一番奥。いちばん広いらしいこの部屋が我が天文部の活動拠点である。先代の部長はものすごく行動力があり熱心だったらしく、部室棟が出来たその年の部屋割り会議でほかの部を論破してここを獲得したらしい。すばらしい。

でもそんな部室も今ではがらんどろ。どうせならいちばん小さいところにすれば良かったのに。

1人部室に立ちながらそう思う。

前までは1人でこんな広い部屋を使えることに優越感に浸っていたのに、どうしてだろう。

リモコンでエアコンを起動して袋を机の上におく。棚を見るとつい最近まであった先輩たちのガラクタが綺麗さっぱり無くなっていた。

携帯を取り出して草津にメールをする。

かちかち。

『今から部室に来ない？ 暇なんだけど（´・ω・´）』
送信。そして受信。

『ふはははは！！』

おれはこれから愛しの彼女とデートなのだよ！！
負け犬は1人寂しく星でも見ているんだな！！ ふはは」

ぱたんと閉じて、思わず床に投げつけそうになったそれを机に滑らせた。

「あー、なんかすごいむなしい……」

ぽつりと呟く。そのつぶやきが空気と混ざって消えていつてしま
うのがさらに虚しい。

暇、淋しい。誰か遊んでくれないかなー。松田？ 田中？ いや
違う。

分かっているけどどうしようもない。どうすればまたあの顔が見
れるのが分からない。今までこんな事一度も無かったのに。
大きなため息をついて床に座り込んだ。

「バイトでもしようかなあ」

この前持倉が楽しそうに穴をあけていた紙を組み立てていった。

●

——出来た。

部活終了時刻ギリギリになって完成したプチプラネタリウム。記
念に一枚パシャリ。

うん、見た目はなかなかの出来だな。と、一人頷く。

「よしじゃあ、点灯！」

スイッチを押せばぼんやりとあたりに丸い光がちらばった。

「……あ、そうだ暗くしなくちゃ」

夏だからこの時間でもまだ明るい。ここが西の角部屋だから特に
厚手のカーテンを閉めて、周りを見れば、いろんな星座が一面に
広がっていた。

棚とかに映るとでこぼこして見辛いなと思い、プラネタリウ
ムをずらす。ずらした先の壁に光った星座はさそり座だった。――

彼が唯一わかると言っていた星座。

「もうなんなんだよ、くそっ」

なんでこんな変な気分になるんだろうか。苦しいのにじわりじわりと熱が身体の奥から滲み出てくるような感覚。

しばらく考えてみて、やっぱりやめた。早く帰ろう。

プラネタリウムを紙袋にそっと仕舞って部室を出た。

部室棟から教室棟までは渡り廊下でつながっている。渡り廊下つてなんかすごい走りたくなるよねーなんて緩いことを考えながら鼻歌を歌う。曲は今人気の女性アイドルグループのものだ。ちなみに何で教室に戻っているかと言うと、教室に居辛くなったと言う理由で部室に来てしまったので、荷物などは何も持っていないからである。アホでもなんでも言えればいい。

俺は5組で階段から割と遠い。別に急ぐ理由も無かったので（下校時間はぎりぎりだが）ゆったり外を見ながら歩いていけば、教室にまだだれか居ることに気付いた。

「…………だよ、な…………だ」

「…………でも…………し」

もっと、もっと近寄ってみようかな。するすると壁にそって教室に近付く。

「見られちゃったのか…………」

「うん。まじどうしよう」

「もう良いんじゃないの？ あいつにも失礼だしよ」

草津？ と、持倉？

「でも、上総も……」

俺！？

いきなり出てきた俺の名前に耳を疑った。俺の失言についての悪口だろうか。不安になりながらも、じり、と扉に耳を貼り付ける。

「……俺嫌だし」

「んー……そりゃちょっと嫌ってのも分かるけどさ。多分気にしないよ？ あいつ」
「……」

嫌な汗が握り締めていた手のひらでにじんだ。聞える音の半分を自分の心臓の音が占めていく。え、やっぱ、そうか。何となくそうかなあとは思っていたけれど、直接聞いてしまうとやっぱり辛い。

こんな俺に、持倉は嫌気が差したのだろう。ついでに草津も。

——俺どんなに嫌われてんの。笑える。

かばんどうしようとか、帰りのバス代どうしようとか思ったけれど、早くこの場を去りたかった。久しぶりに泣きそうで怖かったのもある。じわじわと奥からあの名前の無い感覚がにじみ出てくるのが気持ち悪くて、それを振り切るかのようにダッシュで家に帰った。

急に走り出したから消火栓の赤いボックスに激突したのはここだけの話である。

○○●○○

「うわ、お兄汗だく。走ってきたの？」

家に入って俺のことを迎えたのは妹の柚希^{ゆき}だった。中学3年生で、

可愛い奴だ。

「定期を学校に置いてきちゃってさ」

肩で上下させながら呼吸を整えていると柚希はペットボトルのお茶を持ってきてくれた。ありがとうとお礼を言って飲む。渴いていた喉が潤っていく感覚がして少し気持ち良かった。

「……何があつたの？」

息が整ったところでそう尋ねてきた。相変わらず鋭い妹だ。

「鞆も持っていないし、……泣きそうな顔してるし」

その言葉にはっとして、手を目の下にあてる。涙は出ていない。というか泣きそうな顔とか恥ずかしいしダサいな、俺。

「別になんもねーよ」

笑ってそう返せば柚希は肩をすくめて、あっそうとだけ言った。

「シャワー浴びてね。汗臭いお兄は嫌だから」

「了解」

人並みに妹の事が好きな俺としては、思春期でも俺のことを嫌わない柚希には凄く嬉しい。クールに見えて気を許した相手には甘いな彼女はとても可愛く、自慢の妹である。

あれか、ツンデレなのかも。

そんな愛しの妹に癒され、少し回復した俺は言われた通りシャワーを浴びるために立ち上がった。

風呂場から上がってリビングに入ると柚希がお菓子を夕飯を作って待っていた。この匂いは……オムライスだ。

「あれ、今日母さん達は？」

「2人でデートだって」

「デート？」

いい歳して何してるんだか。

俺の父親と母親は今でもよくデートに行く。この前は某夢の国に泊りがけで行って来たらしい。

「今度はどこに」

「食い倒れツアー」

「はっ？」

よくもまあそんな遠くに。やりたいと思ったたら直ぐに行動する両親らしい。俺が苦笑すれば、柚希は呆れながら笑ってテーブルにオムライスを置いた。オムライスは母さんの得意料理で柚希もよく作っている。

「まあ仲悪いよりは全然いいからね」

「だよな」

「そうそう。だから、時に兄上」

「……どうした、妹よ」

「じっくり話が聞きたいな」

「……………」

柚希はクールで甘えたで……小悪魔なのだった。俺が柚希の笑顔に弱いことを知りながらその笑顔満開で訊いてくるのは狡いと思う。

「拒否権は？」

「教えてくれないの？」

「……………」

○○○●○○

持倉と仲良くなったけど手の傷の事をいったら気まづくなってしまう。そんなようなことを柚希と、途中参戦してきた弟の奏は黙って聞いていた。

奏は今中2で思春期真っ盛りなのに柚希と同じく普通に仲が良い。蛙の子は蛙と言うやつなのだろうか。

話し終わって二人の顔を見る。二人ともなんとも言えない微妙な表情をしていた。

「兄ちゃん、なんか久しぶりに女々しいな」

「奏もそう思った？ あたしもだわ」

め、女々しい？

うんうんと頷き合う柚希と奏。

「いつものお兄って友人関係にさばさばしてるからさ」

さばさばというのがいまいちよくわからなくて黙っていると、奏がたえば、と言った。

「友達に遊ぼうって誘うことないだろ」

「遊びたくなければ普通さそわないだろ」

「部活も誘われたのに天文部入ったし」

「人間関係が面倒だし。上下関係も」

「メールとかしないでしょ」

「たまにするよ」

言われたことひとつひとつに答えていけば、おおきな溜め息を吐かれてしまった。

「でもお兄、その持倉くんとは遊びたいんですよ。寂しくなったり悪口言われて嫌だったんですよ。今までそういうこと全然なかったじゃん」

柚希がそう言い、更に奏が畳み掛けるように言った。

「兄ちゃんさ、

そいつのこといろんな意味で大好きなんじゃない？」

「……………それは、…………えっと」

かちん、と音がなるかのように俺は固まった。

「奏、それは無いんじゃないの？」

柚希もそこまでは思っていないかったようで笑顔が硬い。しかし奏はノンノンと人差し指を左右に振った。

「俺には親友程度の執着とは思えないね。恋愛感情にしか見えません」

「いやいやいやいや、でも男同士だよ？　だってそれじゃあお兄はホモってことになっちゃうんだけど」

「そこはホモじゃなくて、単に持倉って人のことが好きって考えるといいよ」

「なにその慣れ。あ、もしかして奏……」

「俺じゃねーよ。友達だよ。ほら、この前来てた奴」

「えっ、あの子そうなの！？」

「うんうんあいつも兄ちゃんみたいに今の恋人の事になるとすげー女々しくなってるさ」

「そっか」

2人でどんどん話を進めていくのを某然と見てみると、柚希がそう言ってこちらを見た。その顔はもう戸惑いがない。順応力が素晴らしいと思った。

「持倉って人とキスしたいと思う？」

き、きす……。

どうなのだろうか。あのふわふわの髪の毛とか、柔らかい頬にキスをしたらどんな反応をするのだろうかと考える。

たまに見せる照れたようなあのはにかんだ笑みを返してくれるのかな。

「どう？　お兄」

「俺、平気かもしれない。ていうかむしろ……したいかも」

奏は平気かもしれないけど、柚希は引いちゃうかなとじっと目を見ていれば、柚希はにっこり笑った。

「別に私は気にしないよー。ていうかむしろ喜ばしいことだからね。お兄が他人に興味を持てたことは初めてだから」

「ありがとな」

「いーえー」

それから奏と一緒にゲームして俺が圧勝して、3人でテレビみて寝た。

中（後書き）

いつも興味がないものには手をつけることの無かった鳴なので、今回のようなときは妹たちの方が大人です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8287z/>

高校生と青春

2011年12月26日14時53分発行